木の目草の芽

2019年6月25日
公益社団法人
日本山岳会
自然保護委員会
TEL：03-3261-4433

年間購読料 1,000円
申込：047-463-8721
syuaki@pony.ocn.ne.jp
郵便振替00180-4-710688
加入者名：川口章子

自然保護全国集会をさいたま新都心で開催

実行委員長　川口　章子

２０１９年度自然保護全国集会は埼玉支部の協賛をえて開催することになりました。

テーマは「生物多様性と自然保護」です。生物多様性という概念は２０１０年に名古屋市で国際会議『ＣＯＰ１０』が開催されたことで日本でも生物多様性という言葉が普及するようになったが、自然環境や野生生物の保護については特に欧米の保護の意識との違いがあったように思われます。

その例としてトキが日本で保護が叫ばれる前に国際保護鳥に指定されているし、シカ問題もしかりです。

日本は自然と共存し、自然に対して畏怖の念を持ち、信仰や文化に合わせた野生生物の保護をしてきていたと思いますが今、ここで生物の多様性を柱に山の自然を守るにはなにができるかを話し合う集会になることを願っています。

基調講演をしてくださる江村薫氏は「生物と付き合う根源は多様性の把握、人間もいろいろな人がいるように、多くの生き物との共生は豊かな文化の根源となる」と言われています。

中村直樹氏は講演のテーマ「武甲山の希少野生植物について」の講演と連動する提案を分科会②でしてくださいます。

分科会③では山の自然保護活動を進めて行くには私たちになにができるか、できることを進めるにはなど、日頃問題にしていることを出しあい活動の励みになるような分科会にしたいと思います。

７日の自然観察会の場所を北本自然観察公園にしました。

会場からの交通の便の比較的いいところで、今話題になっている「里地里山」の自然環境を残し、野生の生きものが生きやすいように生態系を大切にした運営がされています。野生の生きものの生息場所としての役割をしている自然公園です。ご参加ください。

最後に、体調不良により退会される直前まで会場、宿泊、講師の紹介とご尽力くださった前埼玉支部自然保護委員長・高嶋徳紘氏に感謝いたします。

第１３８号
全国集会レジュメ号
〈目　次〉

P.1 自然保護全国集会をさいたま新都心で開催　川口 章子
P.2 全国集会プログラム
P.3 講師プロフィール　江村 薫 氏　鴨志田 準司 氏　中村 直樹 氏
P.4 自然観察会「北本自然観察公園」
P.5 支部報告
P.22 活動記録

令和元年度自然保護全国集会
メインテーマ「生物多様性と自然保護」
公益社団法人日本山岳会　自然保護委員会・埼玉支部　共催

令和元年７月６日（土）～7 日（日）

◆会場　　埼玉県男女共同参画推進センター・4 階　セミナー室
埼玉県さいたま市中央区新都心 2-2　☎ 048-601-3111
◆植物観察会場　埼玉県自然学習センター・北本自然観察公園
埼玉県北本市荒井 5-200　☎ 048-593-2891

◆スケジュール（予定）
＜7 月 6 日（土）＞

13:00　　受付開始
13:30～13:45　開会挨拶・諸説明
13:50～14:50　**基調講演１**　江村　薫氏（埼玉県生物多様性保全戦略検討委員）
講演内容　「生物多様性と自然保護」
14:55～15:55　**基調講演２**　中村　直樹氏
（入間市環境アドバイザー･埼玉支部自然保護委員）
講演内容　「武甲山の希少野生生物」
15:55～16:00　（休憩 10 分）
16:05～17:30　**分科会**　１生物多様性と自然保護の関わり・・・セミナー室２
分科会　２絶滅危惧種の保護活動・・・・・・・セミナー室３
分科会　３山の自然を守るためにできること・・セミナー室４

17:30～17:45　**閉会挨拶**、　各自宿泊施設に移動
18:30～20:30　**懇親会**／会場ホテルブリランテ武蔵野・２階サファイア

＜7 月 7 日（日）＞

9:15　　受付開始
9:30～10:10　分科会報告と質疑応答
10:10～11:30　支部報告
11:30～11:45　閉会挨拶・植物観察会案内等
※ 植物観察会
集合場所　北本自然観察公園入口・埼玉県自然学習センター前
集合時間　13:30
解散場所　現地・北本自然観察公園
解散時間　自由解散

《　講師プロフィール　》

江村　薫（えむら　かおる）氏

■基調講演

「生物多様性と自然保護」

■分科会①

「生物多様性と自然保護の関わり

１９４８年（昭和２３）東京都杉並区生まれ

東京農業大学卒業（専攻は昆虫学）

埼玉県職員・農林部・埼玉県園芸試験場技師

化学部（植物生理、公害被害）

埼玉県農業試験場

（主に水田、畑作の病害虫、生き物を担当）

２００９年３月埼玉県職員を定年退職

（農林総合研究センター生産環境担当部長）

現在　一般社団法人埼玉県植物防疫協会事務局長

埼玉昆虫談話会会長

※１９８２年（昭和５７）尾瀬ヶ原にて日本山岳会自然保護委員会主催「関東地域における光化学スモック植物被害の発生と広がり」を講演

鴨志田　準司（かもしだ　じゅんじ）氏

■分科会①

発表テーマ

「日本列島の狩猟文化通誌

―ヒトと野生の動物たちとのＷｉｔｈ」

明治大学文学部

考古学専攻

元芝浦工業大学

工学部教授

現在　日本山岳会科学委員

埼玉支部自然保護委員

馬場小室遺跡研究委員

中村直樹（なかむら　なおき）氏

■基調講演

「武甲山の希少野生植物について」

■分科会②

発表テーマ

「絶滅危惧種の保全」殊にＡＰＧ分類

１９３８年（昭和１３）三重県伊勢市生まれ

名城大学　薬学部卒業、薬剤師、中外製薬に勤務定年後、日本山岳会へ入会

カングリ・シャル、シニア２００３遠征

植物では畔上能力先生に師事

現在　日本植物分類学会会員

入間市環境アドバイザー

埼玉支部自然保護委員

※東町公民館の環境市民講座で「希少野生植物と生物多様性」を講演

山を登って花を見て、生物多様性の保全活動を実践しています

７月７日（日）＜自然観察会＞

埼玉県自然学習センター　北本自然観察公園

（所在地：埼玉県北本市荒井５－２００）

北本自然観察公園とは

北本自然観察公園は、埼玉県の「里地里山」の自然環境を残しながら、野生の生き物が暮らしやすいよう、また来園される方が自然に親しめるように整えられた公園です。

1992 年（平成 4 年）７月にオープン、32.9ha の広さがあり隣接する荒川の河川敷につくられた「荒川ビオトープ」と共に、野生の生きものの生息場所として重要な役割を持っています。タカの仲間やキツネを「目標種」とし、それらが繁殖できる環境が適切に保たれるように公園の管理を進めています。

埼玉県自然学習センターは、埼玉県の自然学習、環境教育の拠点となる施設です。生態系の仕組みや自然のめぐみについて学習できる、北本自然観察公園内のビジターセンターです。

＊

公園の自然環境は大きくは 3 つの環境タイプに分けることができます。

雑木林（里山の林）：昔はたい肥にするための落ち葉や薪をとるために使われていました。

草はら：ススキの生える草原は、以前は屋根を葺くために使われていました。

湿地・池：以前は水田として利用されていました。泥が深く田舟が必要なほど水の多い田んぼもありました。

指定管理者：公益財団法人埼玉県生態系保護協会

※「埼玉県自然学習センター」ホームページ
https://www.saitama-shizen.info/koen/index.html から許可を得て転載しています
（写真は北本自然観察公園パンフレットより）

《支部報告》

6月20日までにお送りいただいた支部報告を掲載しています。追加分は次号で紹介します。

■北海道支部　　藤木 俊三

① 高山植物盗掘防止パトロール（大雪山・十勝岳連峰地区）

北海道庁の環境生活部生物多様性保全課の委託事業として6月1日～10月10日の間、事前に登録した支部の会員、準会員、会友36名が大雪山国立公園内で監視活動を実施。最低目標日数は延べ75日／人だが、例年の実績等から延べ100日／人以上の活動を目指す。ちなみに昨年度の実績は23人のパトロール員で延べ114日／人。

具体的な活動としては盗掘の監視のほか、高山植物の踏み付けや盗掘痕の有無、エゾシカやセイヨウオオマルハナバチの生息状況、高山植物の開花状況、登山者数などもチェックする。事前研修として5月17日（金）支部の自然保護研修会を開催し、道庁の担当者からのパトロールの要領の説明を受けた後、一般社団法人エゾシカ協会の赤坂猛会長が高山植物の食害も各地で深刻化しているエゾシカの生態について講演した。

この関連行事として大雪山国立公園で実施される道庁、環境省、林野庁などの合同啓発活動に支部の会員、会友も参加の予定。

② 十勝連峰美瑛富士避難小屋携帯トイレブースの点検清掃活動

トイレ未整備の美瑛富士避難小屋周辺の環境保護のため毎年夏山シーズンに環境省が携帯トイレブース（テント式）を設置。これを北海道の山岳関係の9団体が「美瑛富士トイレ管理連絡会」を結成し、7日～10日間隔で各団体当番制で点検清掃活動を実施。

日本山岳会北海道支部も連絡会のメンバーで昨年度は当初担当予定の8月9日～10日が悪天候で中止となり、8月19日～20日に当該山域に入山の支部会員、会友が点検・清掃活動を実施した。今年度は7月21日（日）に会員、会友数名で活動を計画している。なお、携帯トイレブースは来年度からテント式の簡易型ではなく木造のものが設置されることが環境省、地元の美瑛町、美瑛富士トイレ管理連絡会の三者協定で決定し、この夏着工の運びとなった。

■岩手支部　　阿部 裕二

岩手支部では昨年度、例年通り毎月の例会山行を、それぞれ登山振興（公募登山、清掃登山）、調査研究（自然鑑賞会）、環境保全（山岳パトロール、登山道整備等）に重点を置き実施しました。また、岩手山八合目避難小屋管理当番の分担も行っております。

今のところ岩手県内の山は、めったにゴミも落ちてはおらずきれいで、登山マナーも良好で、岩手支部として早急に取り組むべき大きな課題、問題点は特にありません。

なお、早池峰山や八幡平のオーバーユースによる将来的な懸念や、五葉山の鹿の個体数の変化等、注視すべき事項はあります。

今年度も岩手支部では、毎月の例会山行を、それぞれ登山振興（公募登山、清掃登山）、調査研究（自然鑑賞会）、環境保全（山岳パトロール、登山道整備等）に重点を置き実施する予定です。

なお、地球温暖化の影響なのか、岩手県内でも猪の北上が確認されており、また、昨年度のブナの実の豊作に伴い、今年は熊の個体数の増加があるものと思われます。

最後に、三陸の秀峰、花の百名山「五葉山」の山小屋「石楠花荘」の改修が、五葉山石楠花荘改修促進協議会により完了いたしましたことを、ご報告させていただきます。

■宮城支部　高橋 二義・宇都宮 昭義

1．山岳放射線量の調査及び報告

これまでの岩手・宮城・福島・茨城各県での調査から得られたデータを基にして、事故原発と各山岳との位置・距離などについて再検討を加え、放射能の拡散には二つのタイプ、すなわち匍匐型と浮遊型があることを示し、それらに基づいて放射能の拡散範囲について考察した。この報告は、東北大学山の会の『会報』17号（2018年）に収録していただいたが、『山岳』への二つの調査報告の場合と同様に『別刷り』をつくり関係機関及び山岳関係者に配布させていただいた。

また、これまで近隣県以外の山岳についても若干の調査を行ってきたが、例えば、上高地・横尾テント場や、新潟県関川村・朴坂山など、通常以上の放射線量が実測され、ホットスポットとして捉えられる地域が各地に点在していたことが示された。

2．東日本大震災にかかわる復興事業にともなう土石採取等による里山環境への影響調査

大震災は、地盤沈下した地域への盛土、津波対策としての低地への嵩上げなどの必要から、また沿岸全域に亘る巨大堤防の構築のために、大量の土石資材の調達を被災地周辺の丘陵地や山地に求めざるを得ない状況をつくり出した。また、沿岸都市や集落の高台移転を余儀なくし、さらに丘陵地における新規の大規模団地の造成を加速させることになった。ほぼ時を同じくして始まったこれらの事業によって、既存の土石採取場の拡張とともに、多数の新規の採取場をつくり出すことになり、里山環境に大きな影響を与えることになった。また、高台移転や都市造成は、里山景観を一変させることになった。

これらの大規模改変は、これまでに例のない規模と速度で沿岸部の至るところで進められている。そこでは山容を著しく損なわれた山、山頂が失われた山、山全体が失われた山、山だけでなく里山の自然の大部分が失われた地域が数多く出現している。

これらの状況を踏まえ、宮城支部では実際に起こっている変化を正確に捉え記録すべく調査をはじめている。

（柴崎 徹 記）

■福島支部　高田 雅雄

福島の火山について

福島県には、深田久弥の日本百名山に選んだ山が、飯豊山、吾妻山、安達太良山、磐梯山、会津駒ヶ岳、燧ヶ岳の六座あります。この中には気象庁が常時観測監視している活火山が吾妻山、安達太良山、磐梯山、認定活火山として燧ケ岳があります。また県境近くには蔵王山、那須岳があります。これらの山々は観光地内にあって観光道路を車で簡単に行くことができ観光客や登山者が多数訪れております。しかし気象庁からの火山活動情報が発表されると通行が規制されます。関連市町村では災害防止のハザードマップを作成して住民へ周知しています。

吾妻山では2008年に一切経山大穴火口から噴気活動。2011年発光現象、火山性微動発生。2014年噴火警戒レベル2。2015年硫化水素濃度高くスカイライン全面通行止め。2016年噴火警戒レベル1に引き下げ。2018年3月、大穴火口より警戒範囲が半径0.5 kmから、半径1.5 kmが立ち入り規制範囲となり登山道も規制。9月には小規模噴火の可能性があるとしてレベル2に引き上げ。2019年4月レベル1に引き下げ、スカイラインの除雪作業を始めましたが、5月にレベル2に再度引き上げられました。大穴火口から1.5 km範囲で登山道などへの立ち入りが規制されました。浄土平の観光施設も閉鎖、これからの夏山登山のシーズンを迎え登山者にとっては残念な状態であります。以前、1997年に安達太良山、火口壁での火山ガスによる死亡事故が発生しており今後の火山活動には火山情報を確認して充分な注意

が必要でしょう。

このような状況下、福島支部では登山道の整備、植生の復元作業が出来なくなっています。

■栃木支部

石澤 好文

本支部自然保護委員会は、委員長以下4名の自然保護委員を中心に活動しています。主な活動として、昨年と同様に栃木県山岳連盟との共催事業である『日光清掃登山』及び栃木県山岳連盟、栃木県勤労者山岳連盟との共催事業である『那須クリーンキャンペーン&清掃登山』の二事業を実施しました。この二事業は、平成23年度から山の日制定プロジェクトの一環として取り組み、山の日の普及と啓発活動を兼ねて実施してきました。これらの二事業について報告します。

1．日光清掃登山

本支部関係者は一般参加者4名と栃木支部メンバー5名の計9名で、7月1日（日）親子登山教室の下見を兼ねて日光清掃登山に参加した。

当日、湯元温泉駐車場に7時15分に集合した。開会式の後、8時15分、日光白根山ロープウェイ「センターステーション」前に集合し、8時50分のロープウェイに乗車した。この行事の参加者は18団体128名で、その内白根山（ロープウェイ利用者）コースへの参加者は39名で、特別料金の往復チケット代1000円で乗車させて頂いた。天気は晴れていたが、雲が沸いていて、スッキリした晴天ではなかった。

登山道では、ゴミは全部で5個拾っただけ、それもセロハンの切れ端とか、小さな金具とかだけであった。登山者のマナーが向上してきていることを実感した。

針葉樹林帯のなだらかな登山道から次第に高度を上げ、森林限界に近づくと、コイワカガミの群落、そしてシロバナヘビイチゴやミヤマキンバイ、コケモモ、ハクサンシャクナゲ、コバイケイソウ等の花がたくさんあった。

山頂付近は、登山者が多く渋滞ぎみになり、山頂でのお昼は無理との判断から、手前で食べる。男体山はもちろん中禅寺湖が見え、絶景を堪能することができた。

親子登山教室の下見を兼ねており、休憩ポイントや、下山ルートを確認しながら弥陀ヶ池へ降りたが、急斜面で、岩場の為、落石を受ける危険が想定され、親子登山教室では危険と判断し、ピストンすることに決めた。

「センターステーション」にできた、座禅温泉に入浴し15時15分解散した。

2．那須クリーンキャンペーン&清掃登山

9月2日（日）那須岳山域の美化を目的に開催された那須クリーンキャンペーン&清掃登山に参加した。小雨の中、7時30分から峠の茶屋駐車場で18団体114名が参加し開会式が行われた。

本支部からは5名が参加し茶臼岳～牛ヶ首

～南月山のコースで、清掃活動を実施した。雨も上がり晴れ間の見える中、8時に峠の茶屋を出発。峰の茶屋から茶臼岳に登る。茶臼岳到着9時40分。茶臼岳からは360度の展望を楽しむことができた。暑くも寒くもなく絶好の登山日和である。ロープウェイ山頂駅経由で10時40分に牛ヶ首に到着し、天気も良いので予定通り南月山を往復することにした。途中リンドウやトリカブトの花を眺めながらの楽しい山行となった。11時40分、南月山に到着し昼食にした。12時40分、牛ヶ首到着。峰の茶屋経由で峠の茶屋に戻り、13時30分、峠の茶屋にて解散した。登山道にはほとんどゴミは落ちていなかったが、清掃活動をすることが一般登山者への啓蒙になると思われる。今後とも清掃登山を継続して行きたいと思っております。

■群馬支部　木暮 幸弘

日本山岳会群馬支部自然保護委員会は、2019年度の事業としてカッコソウの咲く鳴神山自然観察ツアーを令和元年5月11日（土）に実施した。

カッコソウは、サクラソウ科の多年草で、世界で鳴神山周辺だけに生育するとても希少な植物。春のこの時期に直径2センチほどのピンク色の花を咲かせるが、残念ながらいまではその姿を山中で見ることはほとんどできなくなってしまった。

環境省のレッドリストで、2000年に「絶滅危惧種IB類」、2007年に「絶滅危惧種IA類」に指定されたこのカッコソウ。2012年には絶滅の恐れのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）により国内希少野生動植物に指定された。採取はもちろん、売買、譲渡、貸し借りなどが禁止されている。

鳴神山でのレクチャー

地球上でここだけにしかないそんなカッコソウを見てみたいというメンバーが、当日は一般も含め18人集まった。参加したのは群馬支部から14人のほか、埼玉支部2人、神奈川支部1人、千葉支部1人。一行は川内町側の駒形登山口を午前9時スタート。同11時、肩の広場に到着後、昼食をさっと済ませ、鳴

鳴神山自然観察ツアーでの集合写真

神山のピークを経由し、カッコソウの移植地に向かった。

　椚田峠から梅田町側に3分ほど下ったところにある移植地で、カッコソウはわれわれをやさしく出迎えてくれた。花の数はそれほど多くなかったものの、参加者はスギ林の中でけなげに咲くカッコソウを愛で、思い思いにその姿をカメラに収めていた。

　天気にも恵まれ、さわやかな風が吹き渡る中、気持ちの良い自然観察山行となった。赤柴経由で13時45分に駒形登山口着。

〈カッコソウのほか当日確認できた主な花〉マムシグサ、ウラシマソウ、ムラサキケマン、ハシリドコロ、ニリンソウ、ヒトリシズカ、フタリシズカ、トウゴクサバノオ、ミツバコンロンソウ、ヤマブキソウ、フイリフモトスミレ、エイザンスミレ、ハルトラノオ、ヒメイワカガミ、ヒイラギソウ、ヒメウツギ、フジ、トウゴクミツバツツジ、ヤマツツジ、ヤマブキ、イタヤカエデ、チドリノキ、ミズナラ

（ほかに確認できた生物）オトシブミ（チドリノキの葉を巻いている）、オオセンチコガネ、タゴガエル（鳴き声）、ミソサザイ（同）、シジュウカラ（同）

（チーフリーダー：木暮幸弘）

※群馬支部ではこのほか、

●2018年8月11日、「山の日イベントin谷川岳」で谷川岳山麓自然観察ツアーを群馬支部主管で実施した。

●2018年10月13日、埼玉支部との合同自然観察会を玉原で実施した。

■埼玉支部

渡邉 嘉也

埼玉支部自然保護委員会は18名で構成されています。樹木、植物の分類、山岳考古学、地勢、山岳信仰など熱心に学んでおられる人をコアーとして観察会、研修会、調査などをしています。

〈2018年度の活動〉

・第5回高尾の森作り研修（4月28・29日）

　研修では、生長を妨げるアオキや蔓そして間伐する樹木を選定し、更に樹木の倒れる方向も決め、鋸や電動鋸を使って伐採を行った。翌日は過去の間伐で光が当たるようになった森での草花の生育を観察した。

・第8回“日本―ラオス友好の森”展示林事業へ参加（7月15日～20日）

　ラオス国ビエンチャン県バンビエン郡FTC国有林で過去の間伐地を見学し、今年度の植樹地で植林を行った。参加者の内訳は現地生徒63人、村人29人、森林局30人、行政局10人、FTC10人、日本人12人、通訳3人、報道2人で総勢168人であった。

・第5回大高取山自然観察会（5月14日）

　2層構造（ミカブ緑色岩類とチャート、砂岩、泥岩からなる全く異なった地層で出来ている大高取山のチャート石灰石の中のウミユリ化石など大地の生い立ちや植生を観察した。

・第5回玉原高原ブナ林・湿原観察会（10月13・14日）

　13日は、群馬支部と協同で玉原自然観察会は長年玉原の植生調査をしている小暮幸弘（群馬支部自然保護委員長）に木の実、キノコ、動物の生息痕、野鳥の解説をして頂いた。翌日は、雨乞山で最終間氷期（20万年前）を経て出来た水域（古沼田湖）によって形成された7段の段丘、沼田面（10～15万年前）、井閑面（6万年前）、貝野瀬Ⅰ～Ⅲ面（3～1.5万年前）、低位面（1.3～1万年前）が片品川に沿って発達している様子を観察した。

・第6次シカ食害調査報告

　これまで埼玉支部自然保護委員会では5次にわたる野生動物による食害状況を見聞してきた。その報告によると、埼玉県下での亜高山地帯から低山におけるニホンジカによる被害状況はシラビソ・コメツガなどの木本類への食害と高山植物やササ類などへの食圧が顕著であり、喫緊な実地踏査の必要性を提示した。そこで、本年度も埼玉県内の山岳地帯におけるシカによる食害問題の現地調査を計画

した。本年度は、調査地域の選定に当たり、埼玉県発表の「第2次埼玉県第二種特定鳥獣管理計画（ニホンジカ）（平成29年度～平成33年度）を参考に、「推定生息密度・地域別捕獲頭数・下層植生の植被率およびササ類の健全度の状況」など既知の要因資料から探索調査地域を策定・選定した。野外調査では、ニホンジカの生息状況・環境および季節移動を区画法で実施し、生息密度・生息環境結果から動態的な棲息状況を可能な限り明らかにすることを予定とした。（鴨志田隼司報告）

・シンポジウム（1月24日）

パルコ10階第14集会室にて第5次シカ調査報告（金丸一豊）、埼玉のすみれ研究（中村直樹）、埼玉の地勢（高島徳紘）のシンポジウムを実施した。

■東京多摩支部　　河野　悠二

ここ1～2年で委員会活動の見直しを進め、一般募集の自然観察会から会員主体の自然観察会を取り入れるようになった。特に昨年末から自分達の自然保護活動ができるフィールド探し（主に里山周辺）と活動内容を検討するチームを立ち上げ検討中である。（毎月第2水曜日に検討チームを開催する。）

自然保護委員会の委員は、25名（男性14名、女性11名）です。

主な活動内容は次の通りです。

☆他団体との協力・参加活動

▽都レンジャー（サポートレンジャーを含む）協働作業

都レンジャーとの日程調整が合わず最近は低調である。

① 雲取山石尾根登山道整備（会員募集）

登山道周辺の植生保護のため、登山道脇にある石などで石積みをして登山道を誘導し、登山道の複線化を防止する。雲取山荘に1泊2日の協働作業で2018年度および2019年度は参加者少なく中止となった。継続の難しさを実感している。

② 奥多摩清掃登山（会員募集）

2018年度および2019年度は日程調整合わず中止です。

▽全国水環境マップ実行委員会による「身近な水環境の全国一斉調査」に参加しております。多摩川と秋川の合流地点3ヶ所の気温、水温、COD（化学的酸素要求量で水の汚染度の指標、パックテスト法）などを調査する。2018年6月3日、4名参加実施。2019年6月2日実施予定です。

☆ボランティア活動

▽三ツ峠アツモリソウ保護活動

三ツ峠山荘のご主人（中村光吉氏）の指導で主にテンニンソウ除草作業を実施しアツモリソウを保護する。2018年6月17・18日に本部自然保護委員会と合同作業で15名参加実施。2019年6月16・17日に本部自然保護委員会と合同作業の予定です。

☆観察会などの実施

▽一般募集での実施（新聞などに募集記事を掲載し募集）

① 御岳山レンゲショウマ観察会とロックガーデン散策

2018年8月20日　一般参加者21名、会員8名で実施。

2019年8月21日実施予定です。

② 高尾山シモバシラ観察会

2018年12月26日　一般参加者5名、会員4名で実施。

2020年1月8日　観察ルート・場所を変えて実施予定です。

▽会員向け

① 春の植物観察会

2018年4月26日　都立長沼公園・平山城址公園にて会員10人で実施。2019年4月25日　都立長沼公園・平山城址公園にて会員21名で実施。

② 秋の植物観察会

2019年9月19日「武蔵五日市駅周辺の幸神神社、大悲願寺を巡る」で実施予定で

す。

☆自然保護講演会

▽一般募集での実施

２０１８年１０月２５日　講師　東京学芸大学名誉教授　小泉　武栄　氏

演題「謎解き登山のススメ～地形・地質から植生を考える～」で一般参加者７名、会員５１名で実施。講師と相談の結果、富士山・御庭で自然観察会を２０１９年８月２８日実施予定です。

２０１９年度は講師、演題、日程を今後検討する。

☆自然保護委員会

毎月第２木曜日委員会を開催し、行事の検討・準備、活動内容の検討などを討議する。

■越後支部

鬣本　修一

「子ども登山教室」事業の継続

越後支部では、昨年８月１１日の「山の日」に、「第２回子ども登山教室」を実施しました。初回の事業を総括し、反省を生かす方向で実施計画を練り、実行委員を拡充して取り組みました。以下に、その概要を報告します。

〈目的・趣旨〉

「山の日」制定の趣旨を受け止め、次世代を担う子どもたちに、山の自然に親しむ機会を提供することで、子どもたちが豊かな自然の素晴らしさや、その自然を守り育てていくことの大切さに気付くことをねらいに実施する。

〈担当する専門委員会〉

自然保護委員会が企画。県山岳協会が共催。運営スタッフは、支部三役を含めた自然保護委員と応援スタッフをもって組織し、実行委員会体制を整えて実施する。

〈継続事業として実施〉

糸魚川市で実施。世界ジオパーク認定地の魅力を生かした登山教室を実施する。５ヶ年計画をもとにして、毎年「山の日」に実施。５回目に新潟県最高峰の小蓮華山を目指す。

〈第２回の取組〉蓮華温泉・蓮華の森遊歩道

◇主な体験学習（事前学習会を含む）

・蓮華ジオサイトの学習（亜高山帯の自然）

・蓮華の森自然遊歩道周辺の自然観察

・遊歩道の登山（登山の基本を学ぶ）

ブナ林での自然観察の様子

子供登山教室の集合写真（蓮華温泉ロッジ前にて）

◇自然観察など（ブナ、湿原の植物など）
・緑のダム・ブナの特徴（地衣類含む）
・湿原地帯の植物群落（兵馬ノ平）保護
・食虫植物（モウセンゴケ）の観察
・蓮華鉱山道の歴史（W・ウエストン）
・蓮華温泉の入浴、温泉の恵み他
◇「子ども登山教室活動記録集2」の発刊
・成果と課題を集約し、次年度へ活かす。
〈第3回の取組計画〉蓮華～白馬大池往復
◇主な体験学習（事前学習会を含む）
・登山の基礎、装備、登山マナーの学習
・国立公園、白馬大池の地形と自然観察
高山植物の保護、ライチョウの保護、
・自然保護と登山マナー（携帯トイレ等）

一回一回の取組を大事にし、事前調査や打ち合わせ等での学びを皆で確認し、運営スタッフのチーム力を強めながら、安全な登山教室を継続していきたいと思います。

■富山支部

河合 義則

富山支部における自然保護活動については、例年通り富山支部主体の活動というよりは各分野での活動に支部会員が大きく関わっているという状況です。毎年夏に行われる小学6年生を対象とした立山登山に支部会員が同行して、立山の自然解説及び安全登山のサポートを行っています。平成30年度は10校で実施しました。その他、各種団体の案内を通して啓発活動も行っています。立山に関しては毎年新たな動きがあり、各種調査の依頼等の要請が富山支部会員へかかることが予想されるため、対応できるように研鑽を深めて行こうと考えています。

立山に関する最近の話題については、2017年6月1日に富山県は第1回「立山黒部」世界ブランド化推進会議を東京で開催し2019年4月16日の第5回の会議を行い、ヨーロッパアルプスの観光形態と施設整備を立山に取り入れようとしてロープウェイの設置等様々なインフラ整備で世界ブランド化してインバウンドの対応強化という目的があるようです。ロープウェイ構想はバブル期のリゾート開発全盛期にも称名滝駐車場から大日平ルートで有りましたがバブルが弾けて中止となった経緯があります。今回は称名滝駐車場からアルペンルート沿いの大観台までをつなごうとする構想でした。案の定、環境省、山荘組合、自然保護団体の反対があり、4月16日の会議では一旦棚上げという結論になったようです。昭和40年代からの行政と自然保護団体の認識のズレについては意外と進展が見られないという印象で、実態を知らない両者がしこりを取れないで何十年もたってしまっているという印象を受けました。

結論について両者の納得する事実認識を真面目にすることが重要です。先ず、認識しなければならないのは、ヨーロッパアルプスのインフラ整備と北アルプス、特に富山県側の自然環境の違いを認識する必要があります。剣岳から薬師岳に至る立山連峰から富山平野側の厳冬期の気象条件はヒマラヤにも匹敵する厳しい気象で、人間の作る施設の耐用年数はとても短く、特にロープウェイのロープの寿命は極端に短くなり、それは膨大な維持管理経費につながります。一年間の稼働日数も現施設より短くなり、その経費を運賃に反映すれば、その経費の高さ故利用者の極端な減少が予想されます。現在の立山黒部アルペンルートにある立山ロープウェイはどうして存続できているのかといえば、それは、富山平野から見て剣岳～薬師岳間の稜線から黒部峡谷側にあるため厳冬期の季節風を稜線が遮ってくれるため、毎年の運航開始前に保守点検、補修、検査がすべてできるのです。立山は稜線のどちら側かによって、条件が全く違います。このようなことを専門家がどうしてわからないのか不思議です。これからも自然と人間の距離感をどのようなスタンスをとるべきか、的確な情報を共有化し、次世代に継承していかなくてはなりません。

■石川支部

埴崎　滋

レッドデータブックのこと

石川県のレッドデータブックは平成11年初版で約10年毎に改編され、令和2年にも改訂版が予定されている。直近の動物編（2009年）ではオオカミ、カワウソ、トキ、ライチョウ、タガメ、ミヤマシジミが絶滅とされ、絶滅危惧Ⅰ・Ⅱで147種、植物編（2010年）ではマツバラン（国＝NT）、オニバス、カザグルマ（国＝NT）、オオアカバナ（国＝VU）、キバナシャクナゲ、ムシヤリンドウ（国＝VU）、ヒシモドキ（国＝EN）、ヒメミミカキグサ等10種が絶滅リストで、危惧Ⅰ・Ⅱで424種である。この内、カザグルマについては昨年の全国集会前に、当支部の安田会員が能美市近隣で自生地を見付けており、集会時に下野本部委員他を現地に案内するチャンスがあった。安田会員は「天然記念物指定」にとの思いがあったと偲ばれる。県下に生息（自生）の〈維管束植物〉は2188種でその内637種（29・1％）がレッドデータブックのカテゴリーとなる。常日頃、何とは無しに見慣れた動・植物種が、気が付くと絶滅種となる。気象変動の影響が今更ながら怖い。電線に群がる雀や燕の囀りが住居環境からも皆無に感じている。

白山（2702m）は北アルプス他の高い山脈から隔離された列島西端での高山帯を有する立地であることから、レッドデータブックでも指摘されているが、1901年～2000年の金沢の年平均気温上昇は1.5℃で、これによる植生帯の高度上昇は250mとされ、100年後の白山高山帯は控え目の積算でも高低差50mを残すのみとなるとの予測がある。自生地でジワジワと影響を受ける植物種の存続に重大な脅威となる。当然の事象として、共生依存捕食する動物類にとっても生活圏が狭隘となり生態系全体に大きな変動がある。指標としての白山高山帯は生息地範囲において、絶滅危惧IAの条件を満たし、亜高山帯はIBの必要条件を満たしている。今後のレッドデータブックに注視が必要である。

県下では、能登半島輪島市沖合60kmの舳倉島と30kmの七つ島の存在が白山と同様の植物種の全部がそれぞれ地域個体群に選定されている。

当会副会長をつとめた〈百名山〉の深田久弥氏（以下「久弥」）が小学生時代に、遠足にて加賀富士と称される「富士写が岳＝941・9m」で山に開眼されたという。この富士写が岳の五彩尾根口の九谷ダム湖畔で、4月下旬の日曜に恒例で「久弥祭」が神事により催される。久弥は「精神の解放の場としての山」

深田久弥山の文化館

久弥祭の祭壇

が信条だとも。これは山好きなら誰もが等しく受容できる。墓碑に「読み・書き・愛した」と記したスタンダールを敬慕した久弥の菩提所の墓の裏面には「読み・歩き・書いた」の修辞が刻まれている。昨年、全国山岳博物館等連絡会議に加盟が許された、生誕地に程近い加賀市「深田久弥山の文化館」は〈百名山〉の自筆原稿、ヒマラヤ関係著作、内外山岳図書に久弥愛用の山道具等の展示がある。金沢や白山の帰路に立ち寄られる外国人も見られる。県下で数少ないシャクナゲが豊かな富士写が岳は、これの保護・育成継続も併せ当支部の大庭会員夫妻を率先とするメンバーが3～11月のほぼ年間を通じてクラシックルートの登山道整備を支部公益事業として反復している。この他、白山越前禅定道杉峠往還、金沢郊外高尾山・順尾山の浅野川・犀川分水尾根の登山道整備も継続している。

■信濃支部

植松　晃岳

ライチョウを絶滅させないために
～山岳関係者にぜひ知っていただきたいこと～

山岳関係者のための講演会

4月6日、信濃支部ではライチョウ講演会（主催：信州まつもと山岳ガイド協会やまたみ）を協賛という形で開催しました。日本山岳会からは、川口自然保護委員長を含めた本部委員及び信濃支部長をはじめとした支部会員など10名以上が参加しました。

この講演会は「山岳関係者のための講演会」とタイトルをつけられ、登山者、山小屋関係者、ガイド、自然愛好家などに特化した講演会でした。そのため参加者の多くは山岳関係者で当初の予定人数の2倍、120名が参加し、熱気があふれたものになりました。講師は信州大学名誉教授の中村浩志先生です。現場での調査を通した報告だけに、現在ライチョウが置かれている状況が非常によくわかりました。講演の内容を要約すると・・・

飼育したライチョウのヒナが死ぬ理由！！

厳冬期の乗鞍岳ではオスは森林限界付近（2400-2600m）の位ヶ原山荘周辺、メスは森林限界より下（2000-2400m）の湯川の急傾斜地で生活する。雌雄それぞれで群れを作り、主なエサはダケカンバの芽である。春になると高山に移動する。

ヒナはふ化3～15日の間に、腸内細菌と免疫機能を獲得するために母親の盲腸糞を食べる。動物園などで飼育したライチョウのヒナが死ぬのは、盲腸糞を食べなかったせいだと思われる。

北アルプスと南アルプスのDNAは異なる

日本には2～3万年前の最終氷期に移動してきた。東北からの侵入経路は頚城山塊経由で、そこから北アルプスと南アルプス方面に行った。そのため南アルプスの集団は、北アルプスよりも火打山、焼山の集団に近い。日本のライチョウの遺伝子のタイプは6つだが、大きく分けると「火打・焼山集団」「北アルプス・乗鞍・御岳集団」「南アルプス集団」の3つである。個体数が少ないだけでなく、遺伝的多様性も低い。現在テンやキツネなど低山動物の高山への進出、ニホンジカの食害、温暖化などで生息数は減っている。特に南アルプスでは急激に減少している。また火打山ではハイマツではなくミヤマハンノキの根元に巣が作られている。さらにイネ科植物が進出し、生息環境が縮小している。

中央アルプスライチョウ復活計画

ライチョウのヒナはふ化から1か月の間の死亡率が高い。原因は天敵と天候不順である。そのため北岳でケージでの保護とテンの駆除を行っている。また火打山ではイネ科植物除去を行っている。目指しているのは飼育技術と野生復帰技術の確立である。2017・2018年では効果があった。また中央アルプス木曽駒ケ岳で2017年にライチョウメスが50年ぶりに確認された。DNA解析で乗鞍岳または北アルプスから移動してきたと思われた。中央アルプスにはライチョウが生息

できる環境があるので、２０１９年と２０２０年には復活計画を行う。

足環の写真を送って下さい

正しい知識の習得と理解と同時に観察情報の提供もしてほしい。特に観察情報、標識個体情報、動物情報、証拠となる写真または映像がほしい。また普及啓発活動、火打山イネ科植物除去、サルの追い払い、捕食者捕獲作業などの保護活動にぜひ参加してほしい。特に足にリングをつけている標識ライチョウを見かけたら、リングの色がわかる写真を撮ってぜひ送ってほしい。

【情報の提供先】

長野県自然保護課
０２６-２３５-７１７８
長野県環境保全研究所
０２６-２３５-１０３１

■岐阜支部　山本 善貫

《平成30年度　活動報告》

自然観察会
６月10日　武奈ヶ岳　参加者15名
９月23日　明神山

清掃登山
６月17日　百々ケ峰　参加者6名
３月10日　金華山　参加者：19名

《令和元年度　活動計画》

自然観察会　５月６日　山県市に咲く花
６月９日　籾糠山
７月21日　花の山
８月25日　百々ケ峰
12月15日　金華山
３月22日　金華山

清掃登山

清掃登山の第１回目は、事前の告知ができていなかったため、参加者が非常に少なかったのですが、ホームページを見られた一般の方の参加が1名ありました。個人で清掃されている方もみえますが、集められたゴミはかなりありました。

２回目の清掃登山は、観光地でもある金華山を選定し、一般の方がたくさん参加するだろうと予想して臨みました。ホームページ、新聞、広報誌などで呼びかけましたが想定以下の結果でした。参加者が13名と増えていますが、山岳会のメンバーとそのお友達で、一般参加は1名でした。今後も清掃活動を年２回は最低でも続けていこうと思います。メンバーも1名増えましたので、自然観察会と併せて新しい活動を盛り込んでいこうと思います。

《感想》岐阜県で豚コレラが発生し、狩猟や有害駆除を行える地域が限定されて、ニホンジカが増えて（減らない）被害が増えるのではないかと心配しています。個体数を減らさないと被害は減らないと思います。皆さんも狩猟について理解を深めていただけたらと思います。

■静岡支部　白鳥 勝治

平成30年度（２０１８年）静岡支部の自然保護活動は、リニア新幹線のトンネル工事がもたらす南アルプスの自然破壊に関する事項で終始した。

◎トンネル工事の現状について

２０１９年４月末現在、ＪＲ東海は静岡県内南アルプスの地下を通過する計画のリニア新幹線トンネル（10・7㎞）について本工事の着手をしていない。

その理由は、２０１４年、ＪＲ東海が上記のトンネル工事により、大井川源流域の表流水が毎秒2トン減少すると発表した数値等、大井川下流地域、8市町に住む住民（約63万人）の生活用水等に対する減漏水の根拠や納得性のある対処の説明が出来ていない、と静岡県が判断して着工の許可を出していない事による。

しかし、当該案件の打開策を担当する静岡県の難波副知事は、4月22日「リニア新幹線トンネル工事の影響は完全には回避できない」

としながらも「南アルプス・エコパークは世界や県民の宝なので公的な機関が絡んで、ボランティアとも一緒に自然環境を守る体制をつくりたい」として、「枯れる恐れがある沢の流量測定」や「大井川上流部の河川生態系監視」等の項目を挙げ、生物多様性保全のため、将来にわたって継続できる体制の提案として「自然環境保全基金の設立」をＪＲ東海へ呼びかけて打開策を求めている。又、南アルプス国立公園内に地域を持つ、静岡市や川根本町など関係市町と基金の詳細について詰める意向を表明した。

一方、静岡市の田辺市長は、井川地区の住民が以前から求めている、市街地から井川地区に通じる県道のうち、富士見峠を越す県道（県道１８９号線～県道６０号線）にトンネルを設ける工事の実施を条件に、大井川源流域のリニア新幹線トンネル工事を認める方向に動いた為、残る課題は静岡市のリニア新幹線建設工事に関する事業影響評価協議会（会長・静大客員教授増沢武弘氏）の畑薙第一ダムから二軒小屋に至る延長約２７㎞の市林道東俣線の整備・改良工事が残るまでになった。

しかし、4月16日、増沢会長は、第8回目の協議会でＪＲ東海と東俣林道の整備・改良工事等道路の安全確保と貴重な動植物保護について議論した後、「まだデータを基に検証する段階ではないので（対策の詳細は）次回以降の課題。安全対策では災害で林道が寸断することも考慮してリスク管理するよう強く求めた」と述べたに留めた。

◎以上の状況への対処

① 静岡県内の山岳四団体と協議をしながら、静岡県民、特に静岡市民について、南アルプスの認識と評価を高めてもらうために、２０１８年11月上旬、山岳四団体共同で、静岡市役所のギャラリーを借用した南アルプス写真展を行った。開催6日間の入場者数は約９００人で成功であったと評価された。

② 静岡の南アルプスと称する講演会を２回行った。聴講者数は合わせて２２０人程度だったが、参加者は静岡市内の赤石山脈に標高３０００m以上の山が11座もあることを知らない人が多かった。又、県庁の所在地に標高３０００m以上の山々が連なっているのは静岡市だけだとの事も知る人が少なかった。

◎あとがき

〝地球上の自然は人間だけに存在するものではない〟と考えている私は、ユネスコのエコパークに掲げている「自然と人間の共生」の基本理念に従って、これから静岡市が、どのような管理計画を掲げて実践するのか注目していきたい。

5月19日、井川地区を訪れて住民の意見を聞いた。住民の一人は、「かつての井川村は、数千人が住んでいた地域だが、時代の趨勢で、現在は６００人を割るほどに減った寂しい地区になった」と嘆いていた。又、同日、源流域の二軒小屋まで静岡市の林道を辿り、各所で河川の景色を観察して来た。

国立公園になった昭和39年（１９６４年）の秋、新雪で化粧をした荒川岳、赤石岳で記念の全国登山大会を開催した頃に建設された畑薙第一ダムは、今日、その三分の一程が石ころと砂地の河原になって、水力発電の畑薙ダムは、20㎞ほど下流の井川ダムと同様に上流部に水がなく砂防ダムに見えた。

赤石山脈は脆弱な地下構造であることは衆知のことなのに、ＪＲ東海はそれでも、このダムの僅か20㎞程の上流に３６０万㎥のリニア新幹線のトンネル掘削度を積み上げるのかと思うと、いかんともしがたい気持ちになって帰って来た。

■東海支部

環境省事業モニタリング１０００里地調査について

井藤 恵美子

東海支部自然保護委員会担当の副支部長より、モニタリング１０００調査を始めたらどうかとの提案があり、２０１７年9月の委員

会で多数決により応募することとなり、２０１９年から２０２３年の５年間、山岳会所有のヤマザクラフイールドを調査場所として動物調査を行うことになった。この事業の事務局は日本自然保護協会である。

10月の締め切りに合わせて、必要書類を井藤が中心となって作成し応募した。応募の内容は、カヤネズミ、カエル、動物の3件である。調査場所を県有林「山路の森」と、山岳会所有の「ヤマザクラフイールド」としたが、県有林での調査許可が下りなかった。猿投の森は、森づくりのためだけに開放したのであるとか、貴重種が出たら人がたくさん来るようになるので困るのでという理由であった。自然保護委員会の担当者を10人決めた。事務局を委員長の井藤として、副事務局を浜島委員とした。

その年の12月に日本自然保護協会からカヤネズミ、カエルの調査依頼が届き、２０１８年1月に動物調査の依頼が届いた。カヤネズミ、カエルの調査地は県有林のサルナシ湿地であるため、止む無く断念し、ヤマザクラフイールドでの動物調査のみを行うこととした。

２０１８年11月に海上の森センターで研修が開催され、東海支部自然保護委員会の6人が出席した。研修終了後に赤外線カメラ、電池、充電器等を受け取った（調査終了後に返却）ほかに、腕章3つ（5年後に返却）環境省の名入りプレート（返却不要）があった。今年の5月4日に赤外線カメラを設置した。5年間もの調査である。自然保護委員の平均年齢は高いため、長期の調査が困難と考え、青年部、学生等への周知を図るために、ヤマザクラフイールドでのキャンプを計画した。幸い、学生や青年部の若い人たちがこのキャンプに興味を示してくれているとともにモニタリング１０００里地調査についても興味を示してくれている。

5年間の長期調査が始まり、体を大切にすることにより、成し遂げたいと思っている。

■京都・滋賀支部

山村　孝夫

京都・滋賀支部の行事としては、月1回の巨木観察を行っています。地球上で最も巨大で長命な生物が樹木です。日本国内では、樹齢が３０００年程という樹木が最も長生きしているものでしょう。これは、縄文時代から存在していたものですから、とにかく側に立っているだけで感動を覚えます。

京都の山々では、伏条台杉という巨木に出会うことがあります。その中で最も太いと思われるのは井ノ口山の巨杉で、幹周り15ｍ、樹齢１５００年。また、京都大学演習林内には台杉の他にトチ、カツラ、ブナ、ミズナラ、ヒノキ等の巨木が存在しています。しかし現在の自分には脚力に不安があり、主に車での探訪となります。会のメンバーの中には、京都一周トレイルの整備や補修、そして清掃登山に汗を流している方もおられます。巨木の探訪途中に、クマザサの小群落を見かけることもあり、少し希望が持てています。

■関西支部

斧田　一陽

関西支部の自然保護活動は、平成30年度も、①「関西支部自然保護委員会」を中心に、大阪府北部の「日本山岳会関西支部本山寺山の森」で、構成員と一般公募による活動主体「本山寺山森林づくりの会」会員による森林保全活動、②六甲山地東お多福山でのススキ草原復元協働活動、③やまみち巡視保全活動、④森林作業体験や自然観察会、⑤関係機関への自然保護協力活動など、構成員や一般にも門戸を広げて活動いたしました。

1　「日本山岳会関西支部本山寺山の森」保全活動

月2回以上、延べ２００名以上が生物多様性の保全促進や地球温暖化防止の寄与を目的に、常緑広葉樹の世代交代のための伐木、倒

木や枯損木の処理、林床整備などの森林保全の活動をしました。9月に来襲した台風21号や24号のため50年生以上のモミやスギが多数根本から倒れ、隣接する東海自然歩道が随所で通行できなくなりましたが、倒木処理に努力して、10月末には迂回せずに通行できるようになりました。関係機関に自然歩道の通行止め表示をするよう連絡、道迷いの人を安全なところまで誘導することもありました。森林内の被害は甚大であり、今後の整備に目途はたっておりませんが、地道に森林保全活動を続けてゆくことになります。

2　東お多福山ススキ草原復元協働活動

「東お多福山草原保全・再生研究会」は、現在9団体で面積も拡大させて、ネザサを刈払いススキ草原への復元を目指して年7回協働活動をしています。刈り取ったススキは、公共施設の茅葺屋根の一部に利用されています。東お多福山ガイド養成講座（行政と協働）卒業生を中心に、観察活動の準備がされています。

3　大台ケ原の利用に関する協議会

近畿地方環境事務所を中心に、関係者の連携、協働を図る会の構成員として参加しています。保護と利用の両面が推進されるよう議論を進めています。西大台利用調整地区の利用申込方法が、利用可能人数に空がある場合は、当日受付けが可能となっています。大台ケ原全域で登録ガイド制が導入され、ワイズユースの普及に努めています。

4　森林作業体験と自然観察会

本山寺山の森活動日には、森林作業体験を随時受入対応しています。8月にツバメの塒入り観察会を実施しました。

■広島支部

前垣　壽男

霧ヶ谷湿原自然再生地の保全活動

西中国山地国定公園にある霧ヶ谷湿原の整備保全活動を平成23年から継続実施しています。平成30年度も会員及び関係団体や一般にボランティア参加を呼びかけ、再生地の森林化への遷移を防ぐため、ハンノキ・カラコギカエデ・ノイバラ等の萌芽の除去作業を中心に第1回を平成30年4月22日(日)に参加者45名（JAC広島支部会員30名・ボランティア15名）で実施し、第2回を平成30年6月3日(日)に参加者36名（JAC広島支部会員24名・ボランティア12名）で実施、第3回を11月18日に会員13名のサポートで導水路補修の準備作業を行いました。

霧ヶ谷湿原は、広島県と島根県境に近い八幡高原の西中国山地国定公園にある湿原の一つで、標高約８００m、臥龍山と掛頭山麓に位置し、太田川の最上流部にある幅約３００m、長さ約７００mの湿地です。

この地はかつて高地特有の貴重な湿地性動植物の生息地でした。戦後は牧場化のための草地開発が行われましたが、厳しい環境のため放牧は成功せず、その後は広島県の自然公園となったものの失われた湿原は元に戻らず

乾燥化や森林化が進行していました。

平成16年には中越信和広島大学名誉教授を会長とする地域住民、ＮＰＯ他各種法人、学識経験者、行政等多様な主体を構成員とする「八幡湿原自然再生協議会」が組織され、広島支部もこの協議会の構成員となりました。こうした中「過去に失われた生態系その他の自然環境を取り戻し、生物多様性の確保を通して自然と共生する社会の実現を図り、あわせて地球環境の保全に寄与することを目的とする」という自然再生推進法に基づき平成19年から3年かけて霧ヶ谷湿原自然再生工事が行われました。

再生工事完了後は「その環境条件の整備を通し自然の回復力で湿原再生を行う」こととし湿地植物、昆虫、魚類・両生類・爬虫類、鳥類などの研究者・専門家による湿原再生状況のモニタリング調査が行われてきました。

管理は八幡湿原自然再生協議会に委ねられたものの、幹線水路から湿地化のため水を取り込む導水路が塞がり、湿地化が想定通り進まず乾燥地性草本やハンノキ・カラコギカエデの萌芽が目立つようになりました。そのため平成23年から協議会の方針に基づき広島支部が中心となり整備・保全作業を実施しているところです。また、平成29年からは協議会及び広島支部有志により、導水路の掘削・補修作業も行い、今春からは導水路から充分な水が供給されるようになり湿原の再生が期待されるところです。

■四国支部

石川 慎吾

四国山地におけるシカの食害状況調査

四国山地剣山系では、ニホンジカの食害によって林床植生が壊滅し、樹皮剥ぎよって多くの樹木が枯死するなど、森林生態系に深刻な被害が発生しています。被害の最も深刻な三嶺山域では、土壌の流失にとどまらず、いたるところで斜面が崩壊するなど、植生を失った山の脆さを露呈しています。

被害の範囲は徐々に拡大し、これまでほとんどシカの生息していなかった石鎚山系でも被害が見られるようになりました。このような状況を受けて、昨年、愛媛県自然保護課は「石鎚山系生物多様性保全推進協議会」を立ち上げました。剣山系では、シカの被害が認識されてからわずか数年で林床植生が消失し、表土の流失に至りました。シカによる被害が一般の登山者にもはっきり分かるように顕在化してからでは、被害の進行を止めることは容易ではありません。その前に、シカの個体数を適正なレベルにコントロールする必要があります。剣山系の深刻な被害状況を見て、愛媛県自然保護課が本腰を入れてその対策に乗り出しました。

私は「石鎚山系生物多様性保全計画検討委員会」の委員を委嘱されましたので、四国山

地全域にわたるシカ食害の現状を知っておきたいと思い、被害の深刻な剣山系から、まだ被害の少ない石鎚山系に向かって、四国山地の主な山域で調査を行いました。

調査の結果、剣山系から西に位置する山域では徐々にその被害の程度が低下していましたが、梶ヶ森、大森山、大座礼山でも強度の食害が確認されました。石鎚山系の東に位置する笹ヶ峰でもすでに中程度の影響を受けているところがありました。

寒風山から伊予富士にかけての稜線では、ササなどに僅かな食痕が見られた程度で影響は軽微でしたが、リョウブの樹皮剥ぎが目立ちました。樹皮剥ぎを受けたリョウブの幹は、鮮やかなオレンジ色になり、遠くからでも目立つので、シカの侵入を知る良い指標となります。

伊予富士より西の山域では、被害はほとんど確認できませんでしたが、環境省などが設置している自動撮影カメラには、シカが写っていました。

今後、四国支部の自然保護活動として、四国山地全域でシカの食害程度の調査を継続的に行いたいと考えています。特に石鎚山系では、シカの侵入をいち早く知り、影響程度の変化を知って、シカ対策に活かしたいと考えています。

■福岡支部

山本　博

全国支部の中で会員の平均年齢の高さで1、2を争う福岡支部です。何よりも欲しいヤングパワーの充足もままならず、毎年高くなってゆく平均年齢を見て頭を抱えています。

会員のほかにも呼び掛けて自然観察会を行い、また「山のトイレ・環境を考える福岡協議会」の仲間とともに山の環境保全、トイレ問題の改善を目指しています。九州地区は携帯トイレの普及が進んでいません。これまで県内の山では、バイオトイレが英彦山、宝満山、福智山の3か所に設置されましたが、地元自治体や山岳団体の努力にもかかわらず維持管理の難しさを痛感しています。南国九州でも冬季の積雪、日照不足などで冬はほとんど機能していないのが実情です。やはり携帯トイレの普及を図らなければならないのでしょう。九州で携帯トイレの先進地とされるのは、屋久島と霧島です。昨年には霧島に東九州支部とともに見学山行を実施しました。現地を見、現地の方々との話し合いは有意義でした。

屋久島の山岳部では世界自然遺産に登録されてからのオーバーユースが大きな問題で、年間入島者が40万人をこえる状態が続き、屋久島町でも入山に際して「山岳部環境保全協力金」として日帰り入山１０００円、山中宿泊予定の入山２０００円の納入をお願いすることになりました（２０１７年３月から）。これでかなりの改善を期待しましたが、職員の横領が発覚して冷や水を浴びせる残念な事態が起こりました。そのため一時は協力金納入のお願い中止のやむなき状況でしたが、今は落ち着いてきたようです。トイレ事情はまだまだと思われますが、町では国や県とも話し合って携帯トイレブースの設置、管理などに力を入れ、引き続き山中での排泄を避けるように呼び掛けています。

屋久島では今年5月中旬の、長老も経験したことがないという記録的な豪雨であちこちで土砂崩れが発生、登山道も通行困難になって３１４人が山中に取り残される未曽有の状態になって大きなニュースになりましたが、大掛かりな対応で全員救出され死亡者が出なかったのは不幸中の幸いでした。日本最初の世界自然遺産として注目を集め、全国的な人気が衰えない屋久島ですが、以前の静かな屋久島にはもう戻らないのでしょうか。

「山の日」制定に関連して福岡でも日本山岳会福岡支部、北九州支部をはじめ地元山岳団体が協力して「夏山フェスタ in 福岡」を開催しています。今年は第4回になりますが、毎回参加者は４０００～５０００人を数える

盛会です。福岡支部も協力している「山のトイレ・環境を考える福岡協議会」はトイレ問題の提起と携帯トイレの普及を呼びかける時間を設けています。今年は6月22（土）・23（日）の両日に開催されます。これからもいろんな機会をとらえて携帯トイレの普及を訴えていきたいと考えています。

■宮崎支部

前原 満之

宮崎支部の自然保護活動は、2001年（H13）4月の委員会制度発足を契機に、自然保護委員会の活動として積極的に取り組むことになった。

1．森づくり活動

2001年（H13）～2002年（H14）、3ヵ所に植樹後、手入れを続けてきた我々の森づくり活動。春には会員が種から育てた苗木のヤマザクラが咲いている。

① 宮崎支部森づくり活動の特徴

宮崎支部の森づくり活動は、自然保護委員会が担当し会員のみで活動している。さらに、自然保護委員長が事務局をしている市民活動団体「水源の森づくりをすすめる市民の会」（森づくりの会）に団体加入しており、そこでの活動が市民と連携した活動となっている。

② 昨年度の活動

30年度、田野の森は道路決壊のため7月の行事は中止した。2月には野尻の森で除伐、枝打ちの作業を実施した。また、森づくりの会の下草刈には2回とも参加した。今後は田野の森について、今まで手入れをしてこなかった個所の手入れを中心に、年2回の育林作業を続けて行く予定である。

2．宮崎自然休養林の登山道

我々が最も身近な山として親しんでいる双石山等の宮崎自然休養林の管理は現在、「宮崎自然休養林保護管理協議会」が行なっている。その構成メンバーに宮崎市山岳協会があり、当支部は30年度より市山岳協会に入会した。今後はその市山岳協会の一員として、宮崎自然休養林登山道の点検・管理等に協力して行くこととしたい。30年度は看板の立替が実施された。

3．森林保全巡視員

他支部でも取り組みがなされている、森林保全巡視員（森林管理局職員による国有林の森林保全巡視活動を補完する役割）の委嘱を、平成30年度から受ける事とした。登山時に気付いた国有林の異常その他特別の状況を認めた場合、随時森林管理局に報告し協力して行くこととする。なお、巡視員の登録は役員、支部自然保護委員等合わせて12名である。

4．清掃登山

1996年（H8）から毎年12月、双石山等の清掃登山を実施している。清掃登山と言っても登山道はさほどゴミは落ちていないため、平成26年から登山前に、登山口駐車場周辺の不法投棄ゴミ拾いを行っている。昨年度は、今までの双石山の小谷登山口から場所を変え、九平登山口周辺のゴミ拾いを実施し、45ℓ袋で18個のゴミを回収した。登山者が捨てたものではないだろうが、気持ちよく登山を始めたい思いからである。

◇自然保護委員会の活動記録◇

〈四月度〉

報告・連絡事項

①理事会報告　4月10日（水）

＊２０１９年度・自然保護委員会活動費決定。

②山岳7団体自然環境連絡会4月22日(月)

川口委員長出席。

＊各団体の活動報告。

＊7団体で合意できるテーマを模索し話し合う。

③自然保護委員会報告

＊4月6日（土）『ライチョウとの共存を目指して　山岳関係者にぜひ知っていただきたいこと』をテーマに、「信州まつもと山岳ガイド協会やまたみ」主催で講演会が松本市で開催、講師中村浩志氏。信濃支部協賛、支部自然保護委員会の活動として支部委員が参加。百人を超す盛会。川口委員長、日吉委員、元川委員参加。

＊4月8日（月）「木の目草の芽」発送。川口委員長、元川、廣田、小林各委員。

＊4月16日（火）埼玉県男女共同参画推進センターに会場使用料を支払い。

埼玉支部高嶋前自然保護委員長、渡邉自然保護委員長、基調講演講師・江村薫氏、中村直樹氏と川口実行委員長が打ち合わせ。

④自然保護4月度委員会開催

4月8日(月)19時～

＊三つ峠アツモリソウ保護活動・東京多摩支部と共催6月16（日）、17日(月)に決定。

協議事項

＊新自然保護委員長の選出について。

最近の委員会への出席率の低さや一部業務の負担が偏っていることなど意見が出る。負担を分担する組織と、体制にする。

＊「木の目草の芽」１３８号企画案。

〈五月度〉

報告・連絡事項

①理事会5月15日（水）

＊令和元年・二年役員候補紹介。

＊寄附受け入れ及び管理規定改正。

②山岳7団体自然環境連絡会5月27日（月）

川口委員長出席。

＊各団体の活動報告。

＊奥多摩小屋閉鎖によるテント場・トイレ問題を話し合う。

③１２０周年記念行事委員会　5月8日(水)

＊１２０周年記念行事のプレイベントとして来年、エベレスト　登頂50周年のイベントを登頂生存者でシンポジウムを開催。

④自然保護委員会報告

5月13日（月）19時～

＊全国集会分科会3「山の自然を守るためにできること」を自然保護委員は百～二百字でまとめ5月末までに提出する。

＊ライチョウ絵はがきにライチョウ冬羽の写真を中村浩志先生が提供してくださった。7月完成予定。

協議事項

＊全国集会関係

分科会のコーディネーターを選出。

参加要項のスケジュール一部修正検討。

＊自然保護委員長選出。谷内剛常務理事を出席委員全員が賛同。

＊全国集会の運営方法、開催地、開催頻度等意見交換する。

２０２０年度は関西支部が候補に挙がり、支部長、自然保護委員長に依頼する。

〈六月度〉

報告事項

6月10日（月）自然保護委員会19時～

＊全国集会最終打ち合わせ　埼玉支部自然保護・渡邉嘉也委員長出席。

《編集後記》 今年も支部報告原稿をお寄せいただきありがとうございました。

会場からほど近い場所に、埼玉県出身の「公園の父」本多静六氏が手がけた大宮公園があり県民の憩いの場となっています。一角には前川國男氏が設計した瀟洒な「歴史と民俗の博物館」も。お時間のある方はぜひ・・・。　元川